

コウノリ湿地ネットニュースレター

# パタパタ

No.  
**22**

コウノリ湿地ネット

🏠 豊岡市城崎町今津 1362  
☎ 0796-20-8560  
✉ toshima8506@iris.eonet.ne.jp  
🌐 <http://wac-s.net>

新年おめでとうございます。今年は野外のコウノリの生息数が百の大台に乗ることも充分考えられます。コウノリの飛来地も人間の思惑を超えて、遠くへ遠くへと広がっています。コウノリたちに置いて行かれないよう、人間たちは心を引き締めて頑張りましょう。



豊岡市日高町広井のたんぼで、J0041 と牛のいる風景(水嶋安夫さん撮影) / 水嶋芳彦さんの観察日誌より

## 目次

●コウノトリから治水を考える	1
●コウノトリ飛来日誌	4
●コウノトリのいる日常	6
●これなんだ?	7
●コウノトリもすむ地域で暮らす人々の技を求めて	8
●ハチゴロウの戸島湿地便り	9
●思うこと・編集後記	12
●「生きものと共に生きる豊岡づくりへの要望書」	13



たくさんの方たちにボランティアに来て頂きました



2013年9月から12月、戸島湿地へボランティア作業に来て頂いた皆様。左上から、兵庫県立豊岡総合高校インターアクトクラブ・トヨタ部品共販㈱・大岡学園・㈱川嶋建設・尼崎小田高校・京セラドキュメントソリューション㈱・台湾大学大学院生・兵庫県損害保険代理業協会・復建調査設計㈱ の皆様です。本当に有難うございました。

## コウノトリから治水を考える

コウノトリ湿地ネット代表 佐竹 節夫

読者の皆様、明けまして おめでとうございます。本年もどうぞよろしくお祈りします。

### ●順調に飛翔範囲を広げていくコウノトリたちを遠目にして親元の豊岡では●●●

豊岡で生まれたコウノトリたちは、新たな放鳥拠点地・朝来市生まれの若鳥も加わって、ついに海を渡りだしました。昨年末時点で、南はこれまでの最南・奄美大島本島と与路島に各1羽、北西は韓国釜山市がすぐ近くに見える対馬(長崎県対馬市)に2羽が元気で過ごしています。また、東には長野県上田市に1羽が初めて舞い降りたり、岡山～九州北部には10羽が集団で飛翔するなど、血気盛んな若鳥たちは活発に行動しています。元々は東アジア全域を生息域にしていた渡り鳥ですので、徐々に本来の姿に戻りつつあるのかもしれませんが、もはや、「豊岡のコウノトリ」という人間の感覚は通用しないということなのでしょう。

今、順調とか活発とは書きましたが、それは鳥の世界のこと。彼らを取り巻く内実は、悠長に「いいねえ」などとはとても言えない状況です。何度も言いますが、野生復帰の取り組みはまだ緒に就いたばかりです。少なくとも100年スパンで取り組む課題ですから。

特に元締め豊岡で課題が山積しています。最も大きな課題は2つでしょう。1つは、全国各地に舞い降り、朝鮮半島に渡るのも時間の問題かと思われるほど行動範囲が拡大し、かつ千葉県野田市においても飼育下繁殖している個体の進展状況に関して、全国的な(あるいは国際的な)個体保護と生息地再生への統一した道標・ガイドラインが存在しないことです。特別天然記念物コウノトリの主務官庁は文化庁ですが、その根拠法令は文化財保護法であり、基本スタンスは①当該文化財の管理者(※1)が事業主体であり、②事業主体に一定の補助を行う、というものです。おそらく法の公布時には今日のようなことは想定外だったのでしょう。結果、今日の、そしてこれからの野生復帰を個体保護と生息地再生(まちづくり)の両面で総合的に展開するには、「文化財保護法に則って実行することはその一部」と位置付けなければなりません。

では、常に状況が変化(進化)する中で野生復帰を総合的かつ全国的に展開していく戦略本部は、一体どこなのでしょう? やはり文化庁? いや兵庫県立コウノトリの郷公園? 本家の豊岡市? 野生復帰事業に取り組む自治体連合? ネットワークされた研究者やNPO? (※2)

今、全国各地に舞い降りているコウノトリ(若鳥)たちは、活発に飛翔しているように見えて内実は、豊岡盆地が個体数の急増と繁殖ペアたちのテリトリーであるために、やむを得ず新天地を求めて彷徨っているのかもしれません。そうであるなら、今年、少しでも戦略本部の姿が見えてくるよう、当会も乏しい知恵を振り絞ろうと思います。

2つ目は、肝心の親元である豊岡が、元締めの地としてずーっと先までコウノトリ生息地足り得るか、保全し続ける覚悟と仕組み・手立てはしっかりできているかです。私たちが前々号以来、現在は引野地区にある運動公園の下鶴井地区への移転問題にこだわり、反対を表明しているのは、その試金石と捉えているからです。面積にすれば、たかが5～6haに過ぎないかもしれませんが、元締めの地として責任を遂行する可否にかかると本質的な問題と考えているのです。

昨年10月末に、市長宛てに「生きものと共に生きる豊岡づくりへの要望書」を但馬野鳥の会との連名で提出しました。その内容については13～14頁に全文を掲載していますので、ご一読いただき、ご意見を寄せていただくとありがたいです。また、コウノトリの郷公園からも11月に「円山川運動公園の移転計画に対する要望書」が市長宛て提出されており、いずれも豊岡盆地最下流部の田園地帯、かつ遊水地、かつコウ

ノリノ良好な餌場である場所に、約4mも嵩上げする施設の造成は再考してほしい旨訴えています。1月10日現在では未だ市の回答はありませんが、別途での市や国交省との話し合いを総合すると、状況は非常に厳しいと言わざるを得ません。

そもそもこの問題は、豊岡盆地～円山川河口周辺における水害防止策から端を発しています。国土交通省によって水害を極力減らす円山川整備計画が昨年3月に策定され、その目玉事業として引野と中郷地内の堤外田に2ヶ所計42haの遊水地(越流堤防で囲んだ大きなプール)の造成が構想されました。洪水ピーク時に270万 $m^3$ を貯留して下流の盆地等への流水を減らし、少しでも水位を下げて災害を軽減させようというわけですが、引野地内堤外地の一角に運動公園があるので、遊水地造成のため移転が必要と。

私たちは、当たり前のことですがこの遊水地造成計画に反対するものではありません。古くから水害を何度となく経験している市民として、この遊水地が水害防止に大きな効果をもたらすなら、大歓迎です(遊水地の底地が湿地状となりコウノリの餌場になり得るかは不明ですが)。私たちは、運動公園の移転先が盆地地下流部の水田地帯で自然の遊水地としても機能している下鶴井地内であることを問題にしているのです。

では、どうするのか？ 私たちはこの間に、豊岡盆地の田園地帯以外への移転、若しくは現位置での改修を提案してきました。国交省、市はいずれも難色を示されており、特に現位置での改修案については、「遊水地(プール)に可能な限り大量の水を溜めこみ、少しでも下流の水位を下げたい」(国交省豊岡河川国道事務所)とのことです。そのこと自体は理解できます。でも、我々素人の頭では、河川区域内の堤外地で5～6ha分の土量を撤去しても、同じ土量で下鶴井の水田で嵩上げするなら、大きな盆地の中で考えると±0ではないかと思ってしまう。縦割り行政の弊害でなければいいのですが・・・。

ことは市民生活の根幹にかかわる治水問題。野生復帰を進める者としても避けては通れません。河川内だけの問題とせず、土木力学だけに頼るのでもない、総合治水に向けて次のとおり提案し、私たちなりに努力していきたいと思えます。

※1 現行法制度では、コウノリの管理者は兵庫県と福井県。

※2 昨年12月に設置された「ニホンコウノリの個体群管理に関する機関・施設間パネル(専門会議)」(IPPM)は、生息域内と域外の連携を掲げており、コウノリ飼育園館・郷公園だけでなく福井県や野田市も参画されています。全国展開への大きな踏み出しと思えます。けれども、私にとってはそこに豊岡市が入っていないのが何とも淋しい限りです。

### ●休耕田・放棄田を活用したピオトープづくりに治水を付加していこう●

城崎の住民の方曰く「かつては上流の朝来の方で『水が出た』と聞いてからこちらに到達するまでには8時間かかった。今では2時間で一気に水位が高くなる」とのことです。一番怖いのが一気水です。延長67kmの円山川は、約1,300 $km^2$ という膨大な流域面積を有しています。支流や水路のコンクリート化と宅地開発、道路整備が著しい近年では、流域全体の水は速いスピードで本川に流れ込み、濁流となって全てが豊岡盆地に流れ込みます。盆地に入ると河川勾配がない上に盆地から河口間は山で挟まれているので水がはけません。地形の宿命を人間がどこまでカバーできるのかが昔からの命題でした。ある程度は水害を甘受し、折り合いをつけて暮らしてきたことも先人の知恵でした。現代の発達した機械と技術を駆使しても、水害を完全に抑え込むことは不可能と言わざるを得ません。

私たちは、次のように考えました。

“上流域に住む市外の方たち、山裾に住む市民の協力を得て、流域全体での滞留時間を長く持たせ、時間をかけてゆっくりと盆地に流してもらえないだろうか”と。要は、計画遊水地への、そして盆地へのピーク時流入水を少しでも緩やかにできたらと思うのです。

上流の方からは、「下流住民のために我々が貯水するメリットがない」との声も出そうです。そこで、「コウノトリ」の登場です。

豊岡市は平成13年度から、私たちもその後に、休耕田や放棄田を活用して湿地・ビオトープづくりを進めてきました。場所はほとんどが山裾、谷あいです。例えば、田結地区での放棄田の湿地づくり。ここでは、谷あいの棚田が耕作放棄後は徐々に畦がなくなって緩やかな傾斜地に戻り、乾燥化が進むうち、一気に水が住宅を襲ったこともありました。しかし、堰堤の補強(県事業)と畦や小規模ビオトープの造成後に襲来した台風では、冠水はありませんでした。具体的な効果検証はしていませんが、若干なりとも効果はあったのではないかと考えています。このことは、山裾のビオトープづくりが、生物の棲みか創出だけでなく山から出る水を一時貯留させる機能を期待できるのではないかと。そう考えて昨秋、一気に水緩和を念頭に入れた湿地づくりを行ってみました。〈写真1〉

このときには、単に重機で掘って畦を造成しただけの常時湛水池ですので、流出水の調整機能まではありません。探してみるといい先例がありました。赤穂市で県の土地改良事務所に「田んぼダム」の実証実験をされているとのこと。早速、赤穂市に視察に行ってきました。そこでは、田んぼの排出柵に流出する水をせき板で調整されています。昨年の試行では、田んぼの冠水防止効果があったとのこと(データ取得はこれから)。〈写真2〉



写真1、昨年の造成現場



写真2、スレート製せき板

ムズムズしている気持ちが速まります。早速に田結で試してみるべく、この1月中にまずは木や石を使って試みることにしました。(この号には間に合いませんので、次号で報告します)

「そんなことしても、バケツ何杯くらいの効果しかないよ」「山の保水力回復が先決だ」との声が聞こえてきそうです。確かにそうでしょうが、(山林荒廃の問題は大きすぎるので別途で議論するとして)、仮に円山川流域1,300 km<sup>2</sup>の何%かが参加したとしたら……。夢物語かもしれませんが、とにかく豊岡の地でコウノトリ生息地づくりと一体型で、まずやってみる価値はあると確信しています。

みんなが身の回りで出来る範囲のビオトープをつくり、生物を呼び込みながら治水にも役立つようにする。みんなでやるから総合治水。豊岡盆地での嵩上げ施設・運動公園に反対する者として、せめてバケツよりは大きな水瓶(みずがめ)くらいの効果が出るように、チャレンジしていきたいと思います。



## コウノトリ飛来日誌

豊岡市日高町広井地区 水嶋 芳彦

水嶋さんは豊岡市南部の日高地区で農業を営んでおられます。一昨年冬、野外で繁殖したコウノトリが水嶋さんの家の近くに飛来しました。それからというもの、コウノトリに魅せられた水嶋さんは毎日のように観察を続け、そのみならず、記録まで採っておられます。今回はコウノトリへの愛情あふれる記録を掲載することを快く承知して頂きました。記録の中から編集部が抜粋して掲載いたします。(パタパタ編集部)

## 2012年2月

豊岡でコウノトリが羽根を一杯広げて雄大に飛ぶ姿を見ると気分が晴れ晴れします。願っても来てくれない、そのコウノトリが2月25日に広井の水田に飛来、夢のようでした。倉敷のHさん、豊岡のOさん夫婦、Nさん達が追いかけて分かりました。その後、三方の地区内を飛び回るようになり、写真愛好家の方たちが、カメラを持ってよく来られます。夜泊るところは野区のNさんの自動車販売の裏のAUのアンテナに決め、毎日帰っており、アンテナが高いので広井からもよく見え、今日も帰ってきているなど安心して見えています。

3月16日 AUアンテナに大きな木の枝を運び、巣作りを始める。

20日 田ノロバス停道路沿いの水田にいるので、通りすがりの人たちが立ち止まってみたり、カメラに収めたり珍しそう。

4月10日 神鍋方面、東河内、名色スキー場近くにJ0006、J0041行動範囲を広げる。

5月 三方地区を飛び回っている。

6月 6月に入り、AUアンテナだけでなく、荒川～広井線の道路沿いの電柱に夜泊るようにならなくなってくる。日中、道路沿いの電柱に止まっていて下を人が通っても怖がらず知らぬ顔。水田にいる時も近くを通っても逃げない。人懐っこいのでJ0041を広井に来てくれたので広(ヒロ)ちゃんと呼ぶようにし、遠いところにもヒロちゃん、ヒロちゃんと呼んでいます。

17日 水田ばかりでなく最近、阿瀬川、稲葉川など川の中に入るようになる。

20日 J0006、ヒロちゃんはメス同士だが広井に住み着いてほしいので巣塔を建てる準備。知り合いの人に鉄柱を譲り受け、巣の部分は弟が溶接ができるので作って貰い弟の家の近くに区長さん、弟、息子、大工さんのみんなまで完成。

8月18日 NAさんよりJ0006が岡山県の倉敷に帰っていると電話がある。

9月 コウノトリたち、8月25日よりいなくなり、9月中消息なくさみしい。

10月16日 ヒロちゃん、豊岡市の奥野にいるらしい。

29日 奥野に会いに行き、30分ほど見て早く帰ってこいよと言って帰る。

11月3日 ヒロちゃん、田ノロバス停に帰っていると区長さん知らせて下さり、見に行く。羽根が白と黒鮮やかになっており、大きくなったような気がする。夜AUアンテナに泊りに行く。

12月4日 観音寺、篠垣、森山方面にいて、作業場横電柱に泊る。

31日 この1年間コウノトリを追いかけて一喜一憂楽しかった。

## 2013年

1月1日 新しい年を迎えコウノトリも元気に田ノロバス停、広井水田にいる。夜はAUアンテナ、作業場横と代わる代わる泊る。

26日 寒波襲来、雪降りて植村直己公園湿地にじっとしており、夜は湿地に泊る。

2月3日 バス停正芳田で牛を連れて行き、コウノトリと一緒にいるところを弟に写して貰う。(※表紙写真)

3月29日 夕方5時、NAさんより電話、森山にコウノリがおると。ヒロちゃんは広井にいるので他のが来ている。南蔵院電柱2本に泊る。

4月3日 JAたじま西支店付近に足環のないコウノリがいると弟が電話してくる。

4月15日 初めて巣塔に泊る。17日～18日も巣塔に泊る。

5月8日 8～9日と足環のないコウノリ広井に来て餌を採り、夕方日高方面に帰る。

21日 夕方、1羽のコウノリが来るがヒロちゃん十戸方面に追い払う。

6月1日～19日まで広井－荒川線の電柱に泊っていたが、泊る場所を変え室区の電柱に向かい合わせに泊る。

7月3日 広井バス停下の水田にJ0022、ヒロちゃん仲良く餌を食べ、夜は室と田ノ口、口の電柱に分かれて泊っている。

31日 夕方帰ってくるとクラックリングで知らせてくれるみたい。

9月4日 田ノ口バス停下の正芳田(30アール)耕運中、どこかで見ていたのか？飛んできて仲良く耕運終わるまでいた。

11日 朝7時前、広井留岡の畑の鹿除けの網に引っ掛かっていると勤めに出る人から連絡あり。弟、息子と助けようとするが嘴で向かってくる。息子が車からタオルを取って来、嘴のところにかぶせて捕まえ、ハサミで羽根や足に巻きついている網を切ることが動かない。近所の人たちも心配、見守るが飛ぶ様子が無い。10分ほどして突然飛び立ち、巣塔、作業場の上空を2回ほど廻り電柱に止まり、足を伸ばしたり羽根を動かしようもないか確認している様子。30分ほどして飛び立ちJA西支店方面に行く。その後Nさんの案内で郷公園のMさんと十戸で様子を見て貰い大丈夫。

13日 J0022、ヒロちゃんが網に引っ掛かったのを上空を廻って見ている怖かったのか帰ってこず。

14日 ヒロちゃんも何処へ行ったのか15日も戻らずJ0022もいない。

16日 夕方荒川の電柱にヒロちゃん帰っている。心配していたので一安心。皆に連絡する。

17日 安心したのに今晚戻ってこない。

10月3日 Oさんより連絡あり、長野県の上田市に行っていると聞き、網に引っ掛かったのに長野の方までよく飛んでいたものだと安心する。が、早く帰ってきてほしい。

16日 朝方、室にJ0022、ヒロちゃん戻ってきている夢を見る。

11月4日 巣塔建て替え準備。和田山よりコンクリート柱貫い、巣塔部分溶接、古い鉄柱を取り除く。

7日 業者さんに無事建てて貰う。ヒロちゃんも元気で彼氏を連れて新しい巣塔に帰ってくるよう、心待ちしています。

25日 コウノリ湿地ネットより電話下さる。元気に上田市にいる。上田市はため池がたくさんあるらしい。たくさん食べているかな？ため池が凍るようになったら帰ってくるだろうと嬉しい電話をもらおう。



上 巣塔に止まる  
下 2羽のコウノリと牛  
(撮影 水嶋安夫氏)



2013年2月4日 戸島湿地管理棟にコウノリの写真を持参下さった水嶋さん御兄弟



## コウノリのいる日常

和歌山市船所 土橋 進

2012年初秋にJ0057が舞い降りてから、地域の日常が大きく変化しました。当初は見慣れない大きな鳥にただ大騒ぎするだけでしたが、しばらくするといつまで居てくれるか気がかりとなり、年を越し春を迎える頃になると「この地のどこがいいんだらうか」との疑問が。その間、過去には和歌山市や紀南地方にコウノリが飛来していたことを知り、8月の6羽飛来に至って紀伊半島がコウノリにとって重要な飛来地の一つであることがわかりました。

改めて当地域の自然環境を見てみると、都市化の波で田畑は確実に減少していますが、わずかに残った休耕田や溜池、そして紀ノ川とその支流には餌場となる環境がまだまだ多く残されています。また、大阪との府県境・和泉山脈が西へ伸びる先には紀淡海峡そして太平洋と、生れ故郷の日本海沿岸と多くの共通点があることに気がつきました。

ただ彼が定住している当地域は郊外の住宅地の真ん中であり、人の生活とはあまりにも近く不安な面もあります。人を恐れず、好奇心が強いという彼の性格は地域の者にとっては微笑ましいものですが、一方、危険な場面に遭遇することも多く、野生動物が都市部で暮らす困難さを強く感じます。そんな住民の不安と心配をよそに彼は一段と逞しくなり、いつしかご近所さんから「和歌山コウちゃん」と呼ばれるようになりました。

この間、1週間から2ヶ月間近く姿を消すことがありましたが、コウノリ湿地ネットの皆さんの情報等によってすぐに消息がわかりました。

二度目の越冬をしているJ0057のこれからの課題は巣作りです。個人が静かに見守るだけといったこれまでの方法とは、次元の違う対応が必要になってくるでしょう。彼がこれからも当地域で暮らしていけるためには、私たち自身の生活環境を改めて問い直す必要があるのではないのでしょうか。それを教えるために遠く紀伊半島まで飛んできてくれたのだと思います。



J0057が餌場にいる  
船所の用水路



船所の夕焼けとJ0057

### 【J0057の定着までの経緯】

2012 7/28 京丹後市内の巣塔から巣立ち

9/17 和歌山市粟に飛来

9/22 和歌山市船所に移動

10/21～28 紀伊半島の南端(那智勝浦町、古座川町、串本町)に

2013 4月初旬 J0057 飛び立ち、姿を消す

6/8 滋賀、富山、福井、大阪阪南市を経て和歌山市船所に戻る

8/9 (和歌山市朝日に6羽飛来、翌日南部町に移動し7羽に)

8/15 J0057 飛び立ち、姿を消す

8/23 J0050(♀)を伴って和歌山市船所に戻る(以後、2度J0050が飛来するが1日で姿を消す)

11月初旬 J0057 出石町へ移動

11/10 和歌山市船所に戻る

### 【この間、船所以外でJ0057が目撃された和歌山市内の場所】

- ・和歌山市和歌浦の和歌川下流の干潟・和歌山市太田の大門川・和歌山市朝日の和田川
- ・あと、写真は撮られていないが数ヶ所の情報あり





これなんだ？ (豊岡で見つけた面白いもの・変なもの)

パタパタ編集長 宮村さち子

コウノリの郷公園から北へ1km程行ったところにくい湿地があります。コウノリの餌場になればと、2006年から放棄田をビオトープとして管理しているところです。

そこで面白いものを見つけました。湿地の管理人に話を聞きました。



2ℓのペットボトル飲み口を切りとり、逆さにはめ込んである

●これは、湿地の生きものを調査するための装置とのこと。ペットボトルを使い、水生生物が入ることは出来るが出られない様に工夫してあります。実際湿地に仕掛けて捕れたのは下記の通り。仕掛けたのはペットボトル2本。

<12月6日>

ペット1(湿地3西側) ドジョウ 13~14匹 ガムシ小 25匹 カエル 1匹

ペット2(湿地8西側) ドジョウ 10~13匹 ガムシ 2匹 ガムシ小 30匹

メダカ 1匹 ヤゴ(ヤンマ) 1匹

水生昆虫は水の中で呼吸ができなかったのか、みんな死んでいました。

そこで次の改良型が登場しました。



●今度は、プラスチックのバケツを利用したもの。全部が水につからないようにして、水生昆虫が死なないように工夫してあります。でもこの形どこかで見たことがあるような？ そういえば、四国の西予市でこれと同じものを使ってドジョウを捕獲し、コウノリの餌としておられました。今回の装置はその西予市のアイデアをお借りして作ったそうです。



●次の調査は、ペットボトル型捕獲器2本と、バケツ型捕獲器を使いました。

湿地に棒を立てそれにペットボトルを結び付けています。バケツは浮かぬ様に、石で重しをしています。

<12月30日>

ペット1 メダカ 6匹 水生昆虫 1匹(10mm)

ペット2 メダカ 6匹 ガムシ小 2匹

バケツ メダカ 3匹 ドジョウ 1匹



●下の2枚の写真はバケツ型捕獲器のさらなる改良型です。魚の入る穴が



二つに増えています。中に入った生物が呼吸できるようにバケツ本体、蓋それぞれにたくさん穴が空けてあります。生きもの調査はよく行われていますが、「調査で困ることのひとつに、面倒であること、調査者の捕獲技術のばらつきなどがあります。手軽で誰でも同じ基準で

判断できることが必要と考えています」と管理人。いろいろ試行錯誤しているとのことでした。

## コウノリもすむ地域で暮らす人々の技を求めて

兵庫県立大学 自然・環境科学研究所／兵庫県立コウノリの郷公園 山室 敦嗣

はじめまして。昨年の10月1日、コウノリの郷公園に研究員として着任しました山室敦嗣と申します。本年4月には郷公園内に開設される「兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科」の教員として教育研究にも携わることになります。私の専門分野は地域社会学・環境社会学で、地域に暮らす人々がみずからの置かれた環境のもとでどのような創意工夫を凝らして生きているのか、に着目して研究をおこなってきました。

郷公園に赴任するまでの約12年間は、福岡市内の大学に勤めていたこともあって、福岡という都市に暮らす人々が時代に応じてどのような技を駆使しながら生きているかを明らかにする仕事にとりくんできました。人々が駆使している技は、職人が身につけた「ものづくりの名人芸」とどまらず、「商売のコツ」「ケンカのおさめ方」「集いの場を和やかにする仕方」といった人と人との関係にかかわるものまでも含みます。それは、家庭や学校や街路など、地域社会のあらゆる場に満ちています。こうした様々な場で、子どもたちには子どもたちなりの流儀が、お年寄りにはお年寄りなりの物事の進め方があり、しかも状況におうじて編み直されていきます。このような特性をもった人々の技は、地域社会が蓄えてきた大切な財産といえるでしょう。その財産をまとめて目録風にした本、『福の民～暮らしのなかに技がある』を地域づくりの糧になればと願いながら、仲間と共につくりました。

福岡から豊岡に移り住んで3ヶ月余り。コウノリもすむ地域で人々はどうのような技を駆使しながら生きてきたのか、そして野生復帰が進展する今を生きているのか。こうした関心のもと、コウノリにかんする記憶を伝える現場や、コウノリもすめる環境づくりの現場などを歩きはじめています。コウノリの野生復帰をめぐる現場では人と人との関係にかかわる技だけでなく、自然とつきあう技がグッとせりだしてきます。このことが福岡での仕事と大きく異なり、私自身学ぶことが数多くあります。

また、野生復帰をめぐる先達に話を聞くことや、資料を読むことは大事な作業ですが、つくづく痛感するのは、現場に立会い人々の振舞いを見て、感じることの大切さです。人々が発揮している技は言葉にできるとは限りません。聞かれた本人も答えることが難しい場合も多く、下手をすると、聞かれたほうが戸惑いかねません。人々が日々それと知らずに使いこなしている技に迫るには、その場に立会い見て感じる。五感を総動員することが必要です。つまり、聞くこと、見ること、感じることが技を読みとる試みの要です。

野生復帰をめぐる多種多様な現場に満ちている技を明らかにし、コウノリもすむ地域で暮らす人々が共有できる財産になることによって、野生復帰の推進力になればと考えています。こうした作業をつうじて、コウノリの野生復帰の先達の苦労や思いを受け止めていきたいと思っています。

今後もさまざまな現場に顔をだすこととなりますが、その節にはおつきあい下さいますようよろしくお願いいたします。

-----  
新修福岡市史 特別編

福の民～暮らしのなかに技がある

発行：福岡市 発行日：平成22年3月31日  
-----



## ～戸島ペア(J0294♀・J0391♂)は仲が良いのですが・・・～

巣塔で、9月20日に初交尾を確認しました。例年よりは約1か月早いものです。このペアは、6月中にヒナを巣立ちさせ、近くの気比や田結で過ごし、秋になるとテリトリー内に帰ってくるのが行動パターンとなっています。そして、恒例儀式のように、夫婦愛を確かめるかのように、10月に1回だけ交尾行動をしていました。この秋には数回確認されています。



観察を続けていると、ペアの仕草で交尾するか否かが分かるようになりました。タイミングは帰巢して5分以内。巣の中央でメスがオスに寄り添うと交尾行動が始まります。巣上で仲良く寄り添い、非繁殖期でも交尾する姿を見ていると、人間に近いものを感じています。

J0017♀は相変わらず連日のように飛来して、巣上にいるJ0294を攻撃し、追い出して巣塔に止まることを繰り返しています。毎回長時間にわたって攻撃されると、戸島ペアのストレスは相当に大きなものと心配しています。攻撃するJ0017も怪我(最悪は死亡)のリスクがあるでしょう。春が近づくにつれ本格的な巣づくりの季節となりますが、年末時点では戸島ペアが巣材を運ぶのは数回しか確認しておらず、巣台を下から見上げると巣材は少ししかありません。巣づくりへの影響も心配している今日この頃です。



私は、J0017の執拗な、本当に執拗な攻撃を目の当たりにして、その理由を次のように考えました。一つは、コウノリの数が短期間で増えすぎたことが最大の原因だろうと。人間が自然環境再生の取り組みをいくら頑張ったとしても、生態系の回復速度はゆっくりとしたものです。コウノリに限らず生きもの全般の繁殖力は高いので、ヒナが成育する上では必然的にエサ不足が生じます。にもかかわらず一挙に70数羽にまで増えたのは、第1に郷公園、行政、市民による保護の手立て(給餌もその中に入ります)、2番目に部分的な自然再生、そして個体に注がれる住民の愛情です。結果、若鳥世代の膨張等が生じ、雌雄のアンバランスによるオスの取り合いになるのでしょう。でも、人間の手立てはコウノリへの愛から出たものなので、だからこそ攻撃を見ていると辛くなるのです。

二つ目は、戸島湿地という餌場のことです。2012年に巣塔南の湧水池を拡大したことで、ここが冬期間も採餌できる絶好の場になりました。J0017にとって、戸島湿地はオスと餌場が一度に揃った「放したくない場所」になったのでは・・・と考えています。これも私たちがコウノリのためにやったことなので・・・。思いは微妙です。「勇敢なJ0017の行動は、私たちのこれからの活動の道標を見せてくれている」と、今年はプラス思考でいきたいと思います。

## ～湿地作業にたくさんの方が来ていただきました～

昨年から事業展開している「少年少女草刈り隊」では、豊岡総合高校インターアクトクラブ・大岡学園・城崎小学校3年生が活動されました。高校生では女子高生の元気さに感動し、小学生では3年生の「コウノリのために役に立つことをするんだ」と懸命に草を刈る姿に、胸が熱くなりました。草刈りを終えた後にも、「この草は刈った方がええで」「今度来た時にしようか」など頼もしい言葉が聞かれました。

企業では、トヨタ部品共販(株)・(株)川嶋建設・京セラドキュメントソリューション(株)・兵庫県損害保険代理業協会・復建調査設計(株)より100名近くの皆さんが草刈りや竹伐り、湿地の造成作業をしてくださいました。

環境学習として、尼崎小田高校の皆さんが今年も竹伐りに来てくださいました。毎年続けてCSR活動や環境学習の場として選んでいただけることはとても嬉しく、私たちにも活力をいただいています。

### ～兵庫県造園建設業協会より松の木を寄贈していただきました～

協会の「美しい県土づくりの為に緑化事業」の一環として、環境のシンボルであるコウノトリが「将来営巣できるような松の木を植えよう」と、行っていただきました。松の植樹は難しいと言われているけれど、会員でチャレンジしてみようと、樹木医・造園技術者の皆さんが検討を重ねられ、元気に根付くための植栽や予防注射が施されています。城崎小学校3年生の皆さんが植樹のお手伝いをして、「コウノトリが営巣しますように」と、願いました。

実際にコウノトリが営巣する姿は、私には確実に見れそうにありませんので、植樹してくれた子どもたちにバトンを託しています。



### ～湿地で『タガメ』が見つかりました～



ラムサール条約登録後のイベントに参加していた市内の小学生が見つけてくれました。豊岡では30数年ぶりとのことで、生きものに詳しくない女の子も、「何かよく分からんけど、数少ない昆虫が見つかり嬉しくなってきた」「今日はタガメの日にしよう」見つけた

小学生よりも、その場にいた大人の方が興奮して、生きもので心をひとつにできることを実感しました。

### ～第5回ハチゴロウの戸島湿地まつりを開催しました～

朝から、小雨が降っていてお客様が来てくださるか心配していましたが、約300名の方がお越しくださいました。東京大学大学院 特任研究員のキム・ウンジンさんに『豊岡におけるラムサール条約湿地周辺で見られる魚類』の演題で講演をして頂きました。ウンジンさんが保全の研究を始められたきっかけは、学生時代に近くのセマングム干潟(韓国東海岸)が開発され、工事後に死んでいく二枚貝や餌を失った渡り鳥をみて「自分の生息地を失ってもそれを言うこともできない生命がある生き物のために、力になりたい」と干潟の生物相調査を卒業論文にしたと話され、皆が心を寄せてお話を聞き入りました。今回は下島耕地のため

池の魚の救出作戦も同時に開催され、ため池から魚が運ばれ戸島湿地の淡水域に放されました。捕れた魚を子供たちが観察し、コウノリ市民研究所の方から説明をしていただきました。コウノリの餌採りと、コウノリと他の生きものとの遭遇の写真を提供してくださる方があり、パネル展示をして皆さんに見ていただき、講演とため池の魚の観察、展示写真、昨日発見された『タガメ』とつながり生きもののお話が中心の『まつり』となりました。恒例のバザーは田結地区、戸島地区有志会・ワークホーム大地・西村風見園の皆様にお世話になり、まつりを盛り上げていただきました。



講演されるキム・ウンジンさん

左 戸島地区  
右 田結地区



～コウノリの飛来先から ♡ ♡ ♡～

コウノリの飛来先から連絡をいただくと、初めて話す方とは思えないほど心が通い合います。「豊岡が大切に育ててくださったコウノリが飛んできました」と電話をいただき、「いつまでいてくれるかしら…大切に見守ります」と、地元の新聞記事を送ってきてくださいました。反対に、コウノリがいなくなった地域の方は、「毎日、いつも止まっていた電柱を見よります。早う、帰って来てくれんかな」と。地元の餌場や行動範囲も熟知され、少しでも生きものが増えるようにと、活動をしておられます。つくづく、コウノリはメッセンジャーだと思います。

飛来先や来館者の方が感動されるのは、長い時間をかけたコウノリ野生復帰の取り組みに対してで、コウノリが悠然と舞う姿に、夢が実現したことへの憧れと敬意をもっておられるような気がします。敬意に恥じないためにも、コウノリを野に放つ日を夢見て励んでこられた先人を想い、私たちにできることから頑張っていきたいと思っています。



湿地内でけミスアオイが見つかりました



上田市に飛来した J0041

## コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿（新規入会）

### 個人会員

京都市 ■■■ 千葉 有紀子 東京都 ■■■ 大山 裕 豊岡市 ■■■ 西垣 務・尾形 昌則  
広島市 ■■■ 勝部 伸一

(2013年9月1日～12月31日)

有難うございました。これからもよろしくお願ひいたします。

### 思うこと

(コウノトリ湿地ネット代表 佐竹節夫)

昨年の暮れに届いた、コウノトリ喜界島と対馬に渡るの報は、私たちに大きなロマンを掻き立てるものでした。喜界島は奄美大島～沖縄諸島～台湾～中国本土をイメージさせ、対馬はもう目の前の韓国が想像できます。特に韓国では来年4月の放鳥が予定されており、日韓双方からのアプローチが続けば…。

“コウノトリが東アジアを自由に飛び回り、人々に幸せを運んでいく” 正月の夢です。

### 編集後記

城崎小学校3年生とおこなった草刈りが、私の力となっている。実家(城崎)やスーパーで「森さ～ん」と声をかけてもらおうと、仲間に会えたようで嬉しくなる。これからも、子供たちと一緒に草刈りをしたい…健康でいたいと、昨年末より筋力を付けられるクラブ(女性限定)に通い始めた。ほんのりと身体があたたまり、よく眠れるようになった。(森)

1年たつのは本当に早いものです。年をとればとるほど、そう感じるのだそう……。昨年は個人的な目標として、やりたいことを端からやる、を掲げました。いろいろ手を出しすぎて、何か全て中途半端になったような。でも満足した1年でした。いったい何に手を出したかは秘密です。今年目標は、昨年以上にいろいろやる、です。(宮村)

### コウノトリ湿地ネット入会のご案内

湿地ネットでは、「正会員」「賛助会員」となり、活動を支援くださる方を募っています。

※正会員 入会金2000円、年会費2000円(積極的に、会の活動を支援くださる方)

※賛助員会 年会費2000円(年3～4回ニュースレターをお送りします。)

その他自由に活動にご参加ください)

会の趣旨にご賛同いただける方は、ぜひご入会をお願いいたします。

### 振込先

郵便振替 (加入者名) NPOコウノトリ湿地ネット/(口座番号) 00900-0-194128

## 生きものと共に生きる豊岡づくりへの要望書

2013年10月30日

豊岡市長 中貝宗治様

コウノリ湿地ネット代表 佐竹 節夫  
但馬野鳥の会会長 早川 貞夫

### 要望の趣旨

日本海の内湾の特徴を今に残し、感潮域が広がる豊岡盆地の自然と生きものの生息環境を将来にわたって保全するため、盆地全域の土地利用計画を策定され、環境保全ゾーンを設定して管理していく法制度等の措置を取られるよう要望します。

### 要望の理由

#### 1. 豊岡市のまちづくりの歩みと土地の位置づけ

豊岡市は、旧豊岡市時代の2002年に「総合計画」により「コウノリと共に生きる」ことを宣言されて以来、「コウノリと共に生きるまちづくりのための環境基本条例(2002年制定)」、「豊岡市環境経済戦略(2003年策定)」を、新市になってからは「豊岡市環境基本計画(2007年策定)」、「いのちへの共感に満ちたまちづくり条例(2012年制定)」、「豊岡市景観計画(2012年策定)」、「豊岡市生物多様性地域戦略(2013年策定)」等を制・策定されて、人と自然が共生するまちづくりに邁進されてきました。そして、それに呼応するようにコウノリも今や80羽弱が大空を舞うに至っています。

今日の状況については、上記の生物多様性地域戦略において次のように述べられています。曰く「一つひとつの小さな目標の達成を積み重ねることで、私たちはようやくここまで来ました。しかし、私たちが失ってきたものの回復は途上にあり、まだ将来にバトンタッチできる基盤がしっかりと築けたわけではありません」(21頁)と。私たちも、同様の認識をしています。

基盤の最たるものが土地です。土地は市民が生活や生業を営む基盤であるだけでなく、全ての生きとし生ける者が何世代にもわたって創り上げ、守ってきた活動基盤です。これを、人間だけの一方的な都合によって原状回復可能な線を越えた改変が行なわれると、まさに「将来にバトンタッチできる基盤」を喪失してしまうこととなります。最大の被害者は生きものであり、最も大きな損失は市民が営々と築いてきた地域文化です。

#### 2. 豊岡盆地自然環境の重要性と現状

言うまでもなく、豊岡が我が国のコウノリの唯一の生息地として最後まで機能したのは、広大な豊岡盆地があったからです。中央に円山川が緩やかに流れ、小高い里山に囲まれた低湿な田園地帯は、古くから縦横に水路が張り巡らされ、大部分が感潮域であることも加わって豊かな水辺環境を構成していました。昭和30年代後半になると、農業近代化によって水田は嵩上げによる乾田化と効率優先農業に変わり、その後の各種開発によって水田面積は約6割に減少しています。しかしそれでも、盆地の中核が水田として成り立っている限りは、農法の転換や自然再生等の取組み等を行うことで一定の生物多様性世界を回復することは可能であり、水田の状態を将来世代に引き継ぐことができます。でも、これ以上改変すると、豊岡の誇るべき水田生態系は永遠に失ってしまうでしょう。

私たちは、今春に円山川運動公園が下鶴井地内の水田地帯へ移設される計画を知りました。当該計画は盆地下流部の水田・水辺環境を著しく損傷し、多様な生きものの生息を困難にするばかりか、将来世代

に対しても大きな負の遺産を押しつけるものと判断し、2回にわたって市当局に意見を申し上げたところです。

また、移設先を当該場所に決定されるまでの資料によって、10数カ所の盆地内水田が候補地として検討されたことを知りました。これは、開発を規制する法的整備がなされていない今日では、最重要水田地帯であっても市当局(あるいは他の行政機関や民間)の思惑次第でいつでも開発可能な状態にあることを表しており、生物多様性の持続的保全の観点から非常な危機感を抱いているところです。

私たちは、将来にわたって生物多様性を確保するため、豊岡盆地全体の土地利用について、市が次の措置を取られるよう要望します。

### 要望の詳細

1. 各地域の生態学的特徴と共に盆地全体の特徴を把握され、行政、市民等が土地を利用する程度・方法によって、どのように盆地の生態学的特徴に影響を及ぼすかを把握されたい。

- ①把握は、水田での稲作農業を持続可能とする観点で行い、エコロジカルネットワーク(特に水系の連続性)を重視すること。
- ②環境調査は、可能な限り市民、研究者等の参画を得て実施されること。

2. 上記に基づき、土地の保全と賢明な利用のための管理計画を策定されたい。とりわけ、ラムサール条約登録区域及び周辺地においては、区域対象住民等との協議により早急に策定されたい。

- ①地域ごとに管理目標を設定すること。特に貴重種の生息等、生物状況の重要な地域はホット・スポットに指定して保全すること。

例

- ・早急に、ラムサール条約登録エリア湿地保全管理計画の策定に着手されたい。
- ・コハクチョウ、シギ、チドリ類等の飛来には、広大な「低茎植物と開放水面から成る明るい湿地」が不可欠。
- ・下鶴井地内円山川右岸河川敷のヨシ原は、ツバメの集団ねぐら入りに必要。

- ②保全管理計画の策定から実施まで、地元住民をはじめとする内外の利害関係者の参加を得て進めること。

例

- ・コウノリ営巣用の人工巣塔設置については、巣塔設置場所の地権者のみならず、当該地区、周辺農家、行政、研究者等で協議・検討してきたことを全ての参考にされたい。

- ③既に生物相が破壊されている箇所は極力再生し、その恐れが確実な計画については計画者の官民を問わず認めないこと。

例

- ・円山川運動公園の下鶴井地内への移設計画は撤回されること。